城北会千葉支部会誌

第４号

平成 19(2007)年 11 月

城北会千葉支部

はじめに

今年も城北会千葉支部の会誌を発行することが出来ましたことは誠に喜ばしいことと思います。

昨年の中島勝氏（S34年卒）の「小泉政治の功罪」についての講演では、政治についていろいろな面からの見方を示唆されたように思います。

今年の参議院選挙、今回の安倍内閣の崩壊では私自身今までの単なる興味本位の野次馬的な見方でなく、もう少し真剣な気持ちで政治を考えることが出来たように思います。

今年は矢野幸男氏（S18年卒）と三宅次郎氏（S20年卒）よりお話を伺って、先輩の記録を残すことが出来ました。その話しの内で一高の安倍校長から「きみ、それは徴兵忌避というものだ」と云われたと伺った時に、私自身中学か高校時代に「きけわだつみの声」を読んだことを思い出し、また最近読んだ本で「学徒出陣から五十年」（発行所　揺籃社）－これは生き残った者達の戦後の記録であるが本人の身のまわりの友人や、兄弟、いとこ達が大勢戦争の犠牲となっているのが分る－を思い出し、先輩の話しを通して自分が歴史に結がっていることを感ずることが出来ました。

高校の入学式の時に、当時の平田巧校長先生が「君たちの先輩に東條大将が居る」と話され、戦後の平和教育を受けた自分としては大変な学校（戦前の卒業生に陸士や海兵に進んだ生徒が多い）に来たものだとショックを受けたこと、またその後社会へ出てS31年卒の理事として城北会活動に参加し、毎年開催される4月の城北会評議員会のあとの懇親会で、明治35年卒の渋谷澄大先輩（当時で90才位）から「自分の同期に東条英機が居る」と云われ、この時も先輩を通して歴史と結がっていると感じたものである、人生は邂逅であると云われており、皆様にはこれからも千葉支部や城北会の集まりで多くの人と出会っていただきたいと希っています。

追記

三宅氏がインタビュー後8月26日に亡くなられたことを斉藤和子氏より知らせを受け驚きました。

三宅氏は温厚な方で、支部長の時代に次の企画をどうするかという時に、当時の幹部の方々が城北会総会に出席されたことがない方が多かったこともあって、私が提案をして一度、城北会総会に千葉支部のテーブルを設けたらどうかと提案をして取り入れていただいたこと等を思い出しました。 ご冥福を祈ります。

平成19年11月

城北会千葉支部

支部長　尾崎　英二

平成18年度千葉城北会記念講演

「小泉政治の功罪」

講師：政治評論家（元ＮＨＫ解説委員長）中島　勝氏（S34）

平成18年11月11日　八幡会館にて

【講師プロフィール】

中島 勝氏

中島　勝氏　略歴

昭和15(1940)年生まれ、東京都出身

昭和34(1959)年　都立戸山高校卒業

昭和40(1965)年　東京外国語大学ロシア科卒業

　同　年　　ＮＨＫ入局　千葉放送局記者

昭和46(1971)年　政治部記者

　　以後一貫して政治取材にあたる

　　主として官邸、自民党、野党、

　　外務省などを取材

平成4(1992)年　政治部長

平成8(1996)年　解説委員長

平成12(2000)年　ＮＨＫ退職

ＮＨＫ部外解説委員、国会議員年金調査会委員などを歴任

現在、政治評論家、明るい選挙推進協会理事

著書　「国会入門」(共著)　信山社

講師紹介

中島さんとは戸山34年卒の同期ですのでご紹介をさせていただきます。

戸山高校というと理系が多いなかで、中島さんはＮＨＫに入局され、政治畑を長年つとめてこられました。また最近では政治評論家としてラジオに出演するなど、幅広くご活躍です。きょうは日本の政治を見詰めてこられた専門家として小泉政権をどう評価するか、いい面も悪い面もあわせて総括していただこうと思います。

講演をお願いした後に小泉内閣が退陣し、安倍内閣が誕生しました。ちょうどいい機会ですので、いろいろ話題の多かった小泉政権を、実像はどうだったのか、専門家として、また我が同窓として中島さんに分析していただこうと思います。

本橋　輝明（S34）

ＮＨＫの政治記者として、長年、政治取材等に関わってきました中島です。

2000 年にＮＨＫを退職して、その後は自称「政治評論家」として時々ラジオに出たり、講演をしたりしております。

国民の政治への関心の低下

私は佐藤内閣から今度の小泉内閣まで、切れ目なしに永田町周辺をうろうろして、いわば“政治のウォッチャー”として永田町の政治を見てきました。そんなことから日頃考えていることを皆さんにお話して、何か少しでも耳新しいことでもお伝えできたらと思っております。

ともかく 30～40 年政治を見てくると、政治の最近の劣化現象がひどくなってきている、政治家もひどくなってきているし、やっていることも相当にお粗末になってきているという気がしてなりません。

そんなことをいろいろひっくるめて考えて、いま、日本の政治で一番遅れている、あるいは欠けている、あるいは政治の弱点と言っていいのは、まず国民が政治に参加しない、そっぽを向いている――ここにあるのではないかというのが私の日頃考えていることです。

国民の政治参加というとまず選挙になりますが、この投票率が概して低い。国政選挙の方がむしろいいくらいで、身近な地方選挙では 30～20％などという投票率がざらにあります。

もっと我々のことで考えると、政治家を育てようとか、政党を育てようとかいう意識が極めて低い。例えば、１か月に１時間でもいいから政治のために汗をかいた人がいるでしょうか。

あるいは、1,000 円でもいいから政治献金をして活動に拠金をした人がいったい何人いるでしょうか。

こんなことを言うと、「何を時代遅れのことを言っているのだ」と言われそうな時代になってしまいましたが、私が言っていることの方が正論ではないか、いまの世の中の方がおかしいのではないかと思います。

国民・有権者が政党を相手にしない。心の中では政治家のことを馬鹿にしたりさげすんだりしている。こんな状況で日本の政党政治だとか、議会制民主主義などというものに、どう見てもあまり明るい展望は開けません。どうしたらいいかということを日頃考えているわけで、私の日頃の問題意識の一端を皆様にお示しした上で、本題の「５年半に及んだ小泉政治」を検証したいと思います。それによって、今の日本の政治が抱えている問題点を明らかにしていきたいと思います。

小泉さんの政治家としての出発点

小泉政治を解くカギは簡単です。“小泉人気”の一点を分析すればいい、これが最も強調したい点であります。５年半にわたる小泉政治を解くに当って、小泉さん個人を考えてみる必要があります。

小泉純一郎さんは、昭和44(1969)年佐藤内閣が最後に行なった解散総選挙で、父の小泉純也さん、防衛庁長官をした政治家が急に亡くなられたので、イギリスに留学していた息子が急遽呼び返されて、「弔い合戦だから出ろ」ということになったわけです。小泉さんのおじいさんは小泉又次郎という有名な戦前の政治家です。家業が蔦職だったということもあるのでしょうか、背中にきれいな入れ墨があったので「入れ墨又さん」と言われた人でした。昭和の初め、日本の政党政治がまだ盛んだった頃、民政党の浜口雄幸内閣で逓信大臣を務めた人です。逓信大臣とは戦後でいう郵政大臣ですが、そういう役職をつとめた人です。明治時代から横須賀を中心に県会議員からたたき上げた人です。ですから小泉純一郎は３代目政治家ということになります。おじいさんの時代から築いたしっかりした地盤がある。しかも「弔い合戦」であるという有利な状況があって、しかも昭和44年の総選挙は自由民主党が全国的に圧勝した選挙でした。新人議員だけで44人も当選している。例えば小沢一郎はそのとき当選した一人です。それだけ有利な条件があるにもかかわらず、小泉さんはこのとき落選したのです。政治家・小泉純一郎を考える時に、ここが出発点だと思います。小泉さんはこのときの落選によって、非常に学習したのではないかと思います。それは「有権者に対して、難しい政治の話などしてもなかなか通じない。どうすれば簡単に、明瞭に、わかるような話ができるか」というところを彼は一番学んだのだと思います。後年、「ひとこと政治」だとか、「スローガンに過ぎない」とか、いろいろ批判はありますが、ともかく小泉さんの言うことはわかりやすい、これは、１回目の落選で肝に銘じた。それまで「訳のわからない若造が難しいことを言っている」と取られた点を反省したわけであります。

小泉さんはそのあと、昭和47(1972)年、田中内閣のもとで行なわれた日中国交回復を受けた「パンダ選挙」というのがあってこれで初当選をして、そのあと連続当選しています。

小泉さんが当選した頃どういう評判だったかというと、まず、政治記者がまったく寄り付かない、彼のところに行っても訳のわからないことを言っていて、人付き合いもよくないから情報もない、時間の無駄だということで政治記者は寄り付かなかった。

ところがなぜか不思議なことに、芸能記者だとか、週刊誌記者とか、別のジャンルの人がよく出入りしていた。これは、小泉さんを目当てにしたというよりは、飯島という、のちに総理大臣の秘書官になって辣腕を振るった人を目当てに集まったという、不思議な事務所でありました。

大衆的人気が命綱

なぜこのような話をするかというと、小泉さんの中心になっている支持層を分析すると、これは飯島秘書官がある新聞社のインタビューに答えて言ったことで、私もまったく同感ですが、「小泉を支持しているのはあなたがたが書く政治記事、あるいは社説には目もくれない層だ」というのです。その人達はどういうところで情報を得ているかというと、まずスポーツ新聞、芸能週刊誌、テレビの娯楽風な政治談義、そんなもので情報を得ている人たちです。恐らく昭和30年代に戸山高校を出た人などは支持層よりはむしろ批判層だろうと思います。1年生議員のときから事務所に芸能記者が出入りしていたことを考えると、当時から小泉さんおよびその黒子の秘書たちは「一般大衆、庶民がいずれ政治的な力を持つ」というところに着目していたと考えられるわけです。

小泉さんの支持層は、単に大衆というよりは、もっと「庶民」という言葉で現わした方がピッタリくるような、顔も見えない、不特定多数、まったく組織化されていないということが特徴だろうと思います。しかし、時々姿を現わすことがあります。例を挙げると、2001年4月、自由民主党の総裁選挙が行なわれました。最後の打ちあげの演説会を渋谷の駅前で行ないました。そのとき隣に田中真紀子がいて、もう一方に加藤紘一がいた。渋谷というところは昼も夜も常に人が出入りしているようなところです。駅から出てきた人はみな足をとめる。周辺から駅に向かってきた人たちも足をとめる。見る見るうちに黒山の人だかりになって、どうしても用事がある人のために後ろの方の一列だけ道を開けて、どんどん膨れ上がっていった。戦後、渋谷であんなに人が出たことがないというような現象が起きました。そこに集まった人たちは、別に動員されたわけではない。ごく自然に集まってくる。ああいう形が小泉さんを支えている人たちではないか。しかもその時の総裁選挙は渋谷だけではなくて、全国各地で似たような現象が起きていました。総裁選挙というのは自民党の党員だけの選挙だったのが、一般党員が「これだけ大衆人気があるならば、小泉に乗った方がいいのではないか」というように動き出してきた。県、地方で行なわれた党員選挙では小泉さんがどんどん勝っていく。そうなると今度は国会議員が「いや、小泉はこれだけ地方でも人気があるし、大衆人気もあるということなら、少し考えを変えなければいけない」、あのときは派閥の代表候補者は橋本龍太郎さんでしたが「これはどうも、時代が違うぞ」というので国会議員も動いた。このように雪崩を打って小泉総裁が誕生して、総理大臣になったということです。

戦後、大衆に目を向けた政治家はたくさんいました。三木武夫さんのように世論を後ろ盾にした人もいれば、田中角栄さんのように“今太閤”と呼ばれてもてはやされた人もいました。しかしいずれも自民党の枠内での話であって、小泉さんのように、党員でもない一般大衆がまず自民党員を動かし、国会議員を動かし、その結果、総理大臣にまでなってしまった。結局、大衆の力が総理大臣の椅子までも左右するという初めての現象が起きた

のです。いってみれば、高度経済成長がもたらした「大衆社会化現象」の極みといっていいようなことが生じたわけであります。

そういう形で成立した小泉政治にとって、“人気を維持する”ということが至上命題である、これが小泉政治のもう一つの特徴ではないかと私は思います。もちろん、歴代内閣は、人気がないよりある方がいいので、それなりにみな人気を上げることを考えましたが、小泉さんにとっては一種の“命綱”という感じでした。

歴代内閣の支持率は、マスコミからいえば、毎月やっている世論調査の「内閣支持率」を比較して見るのですが、大体40％を超えればよしとしてきました。30％を切ってくると「ちょっと低いかな」、50％にでもなれば「おお、これは高いな」ということになる。しかし、30％を切ったからといっても、自民党内で基盤がしっかりしていれば別に心配はないというような運営をしてきました。もちろん、あまりに下がって、政権に影響した例がないわけではありません。３％の消費税を導入し、政治スキャンダルも多かった竹下登さんのときのように、支持率が見る見る下がってきて20％を割り、ある調査では遂に10％を割った調査結果が出ました。竹下さんはこれを見て「このままいくと３％になるわな」と言って、遂に政権を放り出したという話があります。

ところが、小泉さんの場合は60％、70％という支持率が普通でした。50％になると「下がってきた」とまわりは大騒ぎしました。そういう高い支持率で、しかも下がってくるとそれなりの手を打って、常に高い支持率を維持することによって、小泉さんは５年半という長期政権を築いたということだろうと思います。小泉政治にとっては高い支持率を維持することが政治運営の基本目標になっていたということ、これも戦後内閣の中では特異な政権であったと思います。

小泉人気の秘密

何故あれほど人気があったのかというと、これがなかなかわかるようでわかりにくい。私もいろいろ考えてみて「これだ」という確信はありませんが、多分こんなことだろうと思うことを、網羅的に羅列してみます。

（１）わかりやすさ

まず一番は「わかりやすい」こと。これに尽きると思います。込み入ったことを全部飛ばして、要するに一言で全体を言い表すことは何かということを、一番工夫している人です。複雑な事象をスローガン化して、いったんこれだと決めたら何回も繰り返す。詳しく突っ込んで質問してもスローガンしか言わない。標語、例えば「構造改革なくして経済成長なし」とか、「聖域なき構造改革」などうまいことを言う。この手法は別に目新しいことではなくて、ヒットラーとかゲッペルスがやったことと同じです。あまり長い議論をしない。100回でも200回でも繰り返す。しかもラジオという、大衆に情報を伝える文明の利器が発達してきましたから、それに合わせて大衆の理解を得ていった、そのやり方だけ見

ていると、まったく同じことを小泉さんがやっていると思います。

（2）感情表現

それから、「感情の表現の仕方がうまい」。いい例が相撲で貴乃花が怪我しながら優勝したとき、内閣総理大臣杯を手渡すために土俵に上がって「痛みに耐えてよく頑張った。感動した」と絶叫する。普通はあんなことをすると白々しいのですが、あの人の場合はそれなりに様になってしまう。大衆の心をぎゅっとつかんで何かを伝えるという、天才的なところがあると私は認めます。

（3）ぶれない

もう一つは、言動も行動もそうですが、「ぶれない」ということです。これはいいところも、悪いところもありますが、いったん言い出したら絶対に人の言うことを聞かない。本当は改めなければいけないところまで突っ張っているところがありますが、ぶれません。最後まで言い通すということです。

（4）喧嘩がうまい

政治のいろいろな局面を見ると喧嘩の仕方がうまい。啖呵の切り方はプロ級です。

それから、負ける相手と喧嘩しない。だからあの人はアメリカとは絶対に喧嘩しない。ところが弱い相手とも喧嘩しない。一番強そうな相手と喧嘩をする。ですから派閥を相手にするなら、弱い派閥は相手にしない。まず、一番強い旧田中角栄系を狙う。公団を狙うときは、真っ先に道路公団を狙う。きちんと計算していて、最終的には勝てる。負けると思った相手にはいっさい手を出さない。“喧嘩のプロ”であります。

（5）非情

もう一つは、「非情」、つまり「情けがない」。田中真紀子の処遇を見ればはっきりしています。バサッと切ってしまう。郵政民営化に反対した人は全部排除する。そのあと候補に立てた若い人たちに「君達1年生議員は使い捨てになることを覚悟しろ」と言ったそうです。みんな目を白黒させたそうですが、そのように基本的に非情です。しらっとしたことをやる、後に尾を引かない。個人の性格として見れば、そういう人間はどうかなとも思うのですが、政治家という立場から言えば必要な部分でもあると私は思います。

（6）個性豊か

それから何といいましょうか、「個性豊か」であります。髪型ですね。私がいつも行っている床屋の主人が言うには、「小泉人気のかなりな部分はあの髪型にある。あんな訳のわからないヘアスタイルの人が日本中にいますか」という。しかもそれがサマになっている。

私の母は 90 才で健在ですが、小泉さんがテレビに出てくると何を言ったかには全然関心がない。「いい背広着ているね」と、いつも溜息をついています。おしゃれでもあります。そういうようなことで全体として小泉さんの人気があるのだろうと思います。

（7）一匹狼

もう一つ言っておきたいのは、あの人はやっぱり「一匹狼」です。群れない。日本の政治家はどちらかというと数を頼りにして、数でこなそうとする人が多いが、あの人は一貫

して「千万人といえども我行かん」という心意気が、一般庶民に訴えるところがあるのではないですか。一人で髪を振り乱してやっている、それならひとつ応援してやろうじゃないかというような、気持ちを掻き立てるような部分が小泉さんにはあるように思います。

（8）超一級テレビタレント

私が強調したいのは、テレビと小泉人気との関係、これを見逃すわけにはいきません。テレビのキャラクターとして小泉さんを見ると、短い時間にわかりやすくしゃべる、メリハリが利いている、超一級のテレビタレントとしての要素をすべて備えている。小泉さんを出演させると視聴率が上がる。小泉さんが登場するニュースを流すと視聴率が上がる。小泉さんはもちろん、それによって人気が上がる。テレビ界は視聴率、小泉さんは人気、両者の利害が一致する関係が出来上がっていったわけであります。

マスコミの活用

みなさん、「ぶら下がり」という言葉をお聞きになったことがあるかどうか。「小泉さんは1日に2回ぶら下がりがあるが、安倍さんは1回しかない」というようなことを報道陣はよく言います。この「ぶら下がり」とは何でしょうか。私も20年くらい前に誰が言い出したのか調べてみましたが、そのときすでにわかりませんでした。テレビ取材の現場でカメラマンを中心に、三木内閣あたりからぽつぽつ言われ出した。その後の福田内閣、大平内閣あたりからこの「ぶら下がり」が段々盛んになってきました。

それまでは政治家を現場で取材する場合、政治記者がワッとまわりを取り囲みましたが、テレビの時代になるとこれが変ってきました。カメラマンが「ちょっと前を開けてください」といって映像だけは撮ることができる。だけど音までは取れない。音を取るためにはマイクを突きつけなければならない。しかしまわりを人が取り囲んでいるからマイクがなかなか近づけない。そこでカメラマン助手がカメラの前の空間を利用して、しゃがんで下からマイクを突きつける。これがちょうど電車の吊り革につかまっているような感じになるので、これを「ぶら下がり」と業界用語として呼ぶようになりました。

政治家の方も、そこで話すとちゃんと伝わるということがわかってきましたので、積極的に答えてくれます。最近はインタビュアーとツーショットで撮るようになりましたが、「ぶら下がり」という言葉だけは残っていて、いまだに使われています。さらに最近では、マイクもなしにメモだけ取るような取材ですら「ぶら下がり」と言っています。

小泉さんは1日2回、この「ぶら下がり」をやった。そのうち1回はテレビカメラが入る。しかし毎日それほど政治問題があるわけでもないので、なかには“芸能ニュース”のような話があって、「だれそれが結婚するそうでおめでとう」とか、「誰かが受賞してよかったですね」とか、「どなたが亡くなられてお気の毒です」といった類まで、毎日それが茶の間に入ってくる。

実は、テレビというものは昭和 20 年代の後半から普及して、お茶の間に情報が入って

くるようになったとはいうものの、政治家の声がそれほどストレートに入っていたかというと、そうでもない。私が政治記者を始めた30～40年前、総理大臣がテレビ番組に出るというのは年に2回くらいでした。もちろん、公式な記者会見があってそれを中継するとか、国会の演説を中継するとかはあっても、マイクに向かって直接話しかけるということは意外に少なかった。それにはいろいろ理由があって、例えば当時、新聞の力が強かったので、テレビの影響力が政治の世界に及んでくるのを排除しようと、自由にさせなかったというようなことがありました。それが、総理の声が毎日、いわゆる「ぶら下がり」取材で茶の間に入ってくるようになったのは小泉政権になってからであります。

小泉さんの方も、漫然とテレビの取材に応じているだけではなく、自分の方からいろいろ工夫をしていました。大衆を飽きさせない工夫をいろいろしていた。そこが他の政治家と違うところです。

どういうことをしたかというと、政治のプロセスをドラマ仕立てにして、毎日見ているとまるでドラマを見ているように面白い、という手法を大々的に取り入れたのです。「小泉劇場」と言われました。一番いい例が、郵政解散でした。まさかそこまではやらないだろうと思っていたら、バサッと解散してしまった。「死んでもやる」と言ってみたり、「ガリレオは『それでも地球は動く』と言った」と言ってみたり――その地動説と郵政は何の関係もないのに、聞いている人はそのときは「う～ん、そうだ」と思ってしまう。そこがあの人のすごいところであります。

しかも、それまでの自民党の“なあなあ政治”と違って、反対した人間はすべて公認しない、新しい公認候補を次々と立ててぶつける。世間は“刺客”だといって騒ぎ立て、マスコミの関心を集める。“刺客”というが、よく見ると美人で頭のよさそうな女性だったりして、これがまた意外性があってどんどん関心を集めていきます。それを毎日テレビで中継のようにして伝えていく。下手なテレビドラマより遥かに面白い。役者は揃っている。筋書きがない。こういう手法が小泉さんのドラマ仕立ての政治であります。

もう一つ例を挙げれば、ピョンヤンの電撃訪問があります。どうなるのかと思っていたら、金正日（キム・ジョンイル）は「拉致しました」と白状したわけであります。もちろん、その後いろいろ実態がわかってくるにつれ、国民の憤激は高まりましたが、それでもやはり、拉致被害者の一部の方が帰国できたし、それに連なる家族が帰ってきたことは事実であります。しかもそれぞれに、数奇な運命をたどった人たちの人生ドラマが凝縮されている。国民はテレビの前に釘付けになる。

かたやテレビ局の方も、小泉さんと共通の利害関係にあると申し上げましたが、特に民放の場合、小泉政治が出てくる前後から、政治に対する姿勢を大きく変えてきた。戦後のテレビは、最初は力道山のプロレスから始まって、その後視聴率を一番稼いでいるのは野球中継です。視聴率全盛になってきて、「視聴率が稼げることなら何でもやる」という時代になってきて、女性の裸を売り物にする局さえ出てきた。しかし概して、民放というのは「政治などというものには誰も関心がない、視聴率は低い」という逃げの姿勢でした。

ところが、細川内閣のころでしょうか、結構、政治家のなかにも役者がいる、うまく仕立てれば視聴率を稼げる、というように考え方が変ってきました。それが小泉さんでピークになったと言っていいでしょう。

よく「ワイドショー政治」と言いますが、生のままでは駄目です。ちょっと手を加えて、うまく仕立てて、娯楽的に提供していく、こういう手法を民放は開発しました。民放にとっても「ちゃんと政治も扱っている」ということでステイタスを上げるのにも役立つし、政治家にしてみれば「テレビでご存知の〇〇です」と言えば通じるので選挙が実に楽だ。地道な組織活動などしなくても当選してしまう時代になってきました。

改革を味方に

さて、これまでの話で小泉人気の説明ができたかというと、まだ足りないように思います。ひとつ付け加えたいのは“失われた10年”といわれた長期不況が、小泉さんの人気を支える上で有利にはたらいたのではないかということです。それまで歴代の自民党政権は、次々と打つ手がちっとも効果がない。借金は積み重なるばかり。景気は少しもよくならない。国民から怨嗟の声が自民党に集中していました。

小泉さんはそういう自民党を「ぶっ壊す」と言いました。彼は「改革」という言葉を打ち出しました。過去にも「改革」という言葉を使った人は何人もいますが、同じ言葉なのに小泉さんが使うとまったく違う印象を与えました。「改革」という魔法の言葉を旗印にしたことが、あの人の成功の重要な意味合いではないかと思います。民主党も「改革」と言っています。しかし、小泉さんは「改革は俺の方が先だ」という印象を与えました。そうなると、民衆も「まあ、小泉さんなら何かひとつやってくれるのではないか」「この男なら託してみようか」ということになりました。やはり不況であるがゆえに、何とかこの現状を変えてほしい。既存の政治勢力、政治家に任せておいたのでは駄目だ。小泉くらいに変った奴でないと駄目だ、という空気が日本中にガスのように蔓延していたのではないか。それにうまく火がついた。こういう要素を見逃すことはできない。不況であるがゆえに「時代の申し子」であったのではないかと思うのであります。

もうひとつ、他の政党との関係を見逃すわけにはいきません。小泉さんは「自民党をぶっ壊す」といって人気を得ました。しかしよく考えてみると民主党という政党は「政権交代」を旗印にしてかなり台頭してきていたのです。ところが、「自民党が駄目なら民主党」というようにならないのが、いまの日本の政治の基本構造であります。「民主党というけれども、まだちょっとどうかな」「まだ頼りない」「安心して任せられない」というところが、市民レベルの声としてあるのではないでしょうか。それよりは小泉の言っている「自民党をぶっ壊す」という体制内改革の方に賭けた方がいいのではないかと考えた。そういう点を見落とすわけにはいきません。“民主党の未成熟”——これに小泉さんは助けられた要素もある。

大体、私はこんなことが総合されて、小泉人気というものを形づくっていたのではないかと考えます。小泉人気が小泉政治をとくカギだと思ったので少し詳しくお話をしました。

小泉政治の功罪

では一体、小泉さんは何をやったのかということについて、次にお話をいたします。

私は「小泉政治の功罪」と言っていますが、「功」の部分で言えば、①自民党の派閥政治を壊した、②国民の政治への関心を高めた、③行財政改革で一定の成果を上げた、この3点を挙げたいと思います。

逆に「罪」というか、問題点としては、①政治手法に問題がある、②いろいろな面で格差を拡大した、③アジア外交で失敗した、の3点があろうかと思います。

「派閥を壊した」と私が言うと、「いや、自民党の派閥は現に存在しているではないか」とおっしゃる人もいますが、いまある自民党の派閥は、私から言わせると“仲良しクラブ”です。私たちが長年にわたって批判してきた「派閥」というものはこんなものではありません。実際は「派閥」という名前の「党」なのです。自民党というのは“派閥が連合して出来上がっている政党”というように考えた方がいい。“永久に政権を維持しようという目的のために、いくつかの党が連合している”と考えた方がいいと思います。従って派閥は、基本的には「戦闘集団」であり、同時に新人議員が入ってくれば手取り足取り教えたり、陳情がきたらどう処理するか、政治資金をどう集めるかといった、相互扶助の機関、連帯の機関でもあります。政治家にとっては、派閥に忠誠を尽くしている限りいずれは大臣になれるという「ポスト配分機関」でもありました。しかし、ここで問題があったのは、「政治資金」のところです。膨大な金がかかるようになって、ここに落とし穴があった。70年代、80年代の自民党は毎年のように政治スキャンダルにまみれていて、次第に自民党の支持基盤が切り崩されていったのです。小沢一郎や羽田孜のように、それだったら自民党を飛び出して政治改革をやろうということになったのですが、基本的にいうと「小選挙区」という制度が出来上がった段階で、もう派閥が存続する基本的な条件は失われたのです。ただ、流れの中で惰性でやっていただけです。「政治資金」の面で金が集まりにくくなった。不景気でもあるし、制度的にも引き締めがあった。まして派閥などに金が集まらなくなった。そこで政府は「政治資金改革」のときに税金を投入しました。赤ちゃんまで含めて1人250円、全部で300億円くらいのお金を政党に投入することをしました。それは派閥にまでは行きません。だから党本部が強くなっていったのです。

余談になりますが、民主党などは年間予算のうちの6～7割はこの税金でまかなっています。自民党も4割を超えて5割に近いのではないでしょうか。それくらい税金が各政党の財源になっている。共産党は「こんなものもらえるか」といってもらっていません。

ともかく、資金面、選挙制度の面で、派閥が存続する条件はもうなくなりました。小泉さんは何をやったかというと、先程申し上げた、田中・竹下以来一番強い派閥に目をつけ

て、５年半にわたって派閥のポスト配分機関という機能を全部停止させました。派閥から「○○を大臣にしてくれ」といってくるのをすべてはねつけた。「人事は俺の好きなようにやる」と言って５年半、相談に応じなかった。旧田中・竹下派は「小泉さんでいいや」というグループと、反対するグループの２つに事実上分裂して、派閥の体をなしていないということになりました。

このことは功績としてあげてもいいと思いますが、問題は派閥を壊した後の自民党が自動的に近代的な国民政党になるかというと、そんな保証は何もない。それに対して小泉さんは何の手も打っていません。私も驚いたのですが、ポスト小泉の党員選挙をやったら、一時期、300～400 万人いた自民党党員が 100 万人くらいに減っている。これひとつ見ても衰退が激しい。見かけは衆議院議員をたくさん取っていますが、私の見る限り自民党の力は大変落ちています。それを小泉さんの人気と公明党の選挙協力でかろうじてしのいでいるというのが実態であります。だから現状は「張子の虎」ではないかと思っています。ともかく、近代的な組織政党になるための方策は、まったく手つかずのまま残っているということであります。

次に功績としてあげたいのは、「政治への関心を高めた」ということ。これは小泉人気を原動力にした政治ですからある意味では当然ですが、特に言いたいのは、投票率が郵政選挙以前の 60%から郵政選挙で 67.5%へと 7.5 ポイント上がったことです。よく見てみると、特に 20 才から 35 才くらいまでの若年層の有権者の投票率が非常に上がっている。全国軒並み 10 ポイント以上あがっています。この若年層の過去の様子を見ると、投票に行くのは大体３人に１人、３人に２には棄権するという一番投票率の低い層だったのですが、これが２人に１人とまではいかないが、かなり投票率が上がってきました。これが定着してくれればありがたいことなのですが、どうなりますか。しかし、これまで政治にそっぽを向いていた若者の中でも、投票に行ってみてあれだけの劇的な変化が起きれば、「選挙というものもまんざらではないな」ということになって、若年層の投票率がこれから上昇傾向をたどるのではないか。これが日本の政治にかなりの影響を与えるのではないかと私は分析をしております。

行財政改革で一定の成果があったということですが、不況を脱出した時期が小泉政権の時期と重なっていたことから、小泉さんは「俺のせいで不況を脱出できた」と言うでしょうけれども、後から分析してみると小泉さんが政権について半年くらいした 2002 年の１～２月がちょうど景気の底でした。それまで役に立たない政策ばかりやっていて、不況がすっかり長期化してしまって、もう、時間的に自然反騰する時期に入っていたということも言えるのではないかと思います。

しかし、不良債権をバサッと処理した、これは功績として認めていいと思います。それまでは検査をするたびに銀行は隠そうとしていたために、不良債権が増えていった。税金を投入しようというけれども、ちょびちょびやっているから効果が上がらない。小泉さんの時点で徹底的に検査して、全体像をはっきりして、ドンとつぎ込むことをやりました。

それまでは、これしかないはずなのになかなかやらなかった。小泉さんはそれをバサッとやってしまった。これは私は功績として認めていいと思います。

もっと功績として私が言いたいのは、国債を減らそうという方向に舵を切ったことです。歴代内閣は、長年効果もないのに国債を発行して、見る見るうちに借金王国にしてしまった。ちっとも良くならない。こういう馬鹿なことを続けていた。小泉さんになってやっと「こんな馬鹿なこと、やめようよ」と言い出した。最初に彼は「国債30兆円に抑える」と公約しました。厳密にいうと30兆円は守られませんでしたが、細かい数字はともかく、方向を変えた、これからは歳出カット、国債を減らそうという方向に政治の舵を切ったということは功績として認めてもいい。考えてみれば750兆円も借金がたまっていて「どうせ返せないのだから、あといくら借りてもいいや」というのはあまりにも無責任でした。舵を切ったお陰で、現に2011年くらいには過去の国債分の元本を借りかえたり、利子を払うことには国債を発行せざるを得ないが、新たなことについては税収だけでまかなえるようにする段階に来ています。小泉さんの経済・財政政策の方向転換はプラスと見ていいと思います。〔註―小泉さんは国債の減額を公約しましたが、在任中の5年半の実績で検証してみると、歴代の首相の中で、一番、国債の残高を積み上げてしまいました。言ったことと、やったことに大きな違いがあったと認めざるを得ません。私の講演で、この部分は小泉さんを評価しすぎたと反省しています。訂正のつもりで註記します。―中島―〕

具体的にやったことで言いますと、“三位一体”と言って、地方税と補助金と地方交付税を一緒にして改革しようとしていますが、これは落第点だと私は思います。地方自治と国との分担をどうするかというグランドデザインが出来ていないまま、金のやりとりだけしているからうまくいかない。「身近なことは国から地方自治体へ」と言っているが、では身近な自治体といえば市町村ですが、いまある都道府県はどうなるのですか、「道州制」を論議している段階ですから、そのへんがきちっと決まらないまま金のやりとりだけ話をしてもうまくいかない。“三位一体”はまだまだ泥沼状態ということです。

道路公団の改革もやりましたが、小泉さんがこだわった経営形態だけは民営化した形になっていますが、国民が一番問題にしたのは「無駄な道路をたくさんつくっているのではないか」ということです。出来上がったものを見ると、複雑な仕組みでわかりにくいのですが、どうも最初に計画した道路はつくるようです。今後、無駄な道路をどれだけチェックできるかどうかということでしょうけれど、これは私のおおざっぱな言い方をすれば、合格点ぎりぎりのところでしょう。

郵政も大変問題になりましたが、これにも私は不満です。議論すべきだったのは「郵政の民営化の中身」だったのですが、小泉さんはそれを「民営化賛成か、反対か」という議論にすりかえてしまった。結局、政府が出した民営化だけがまかり通るということになりました。もっといろいろな民営化があったはずが、そのへんの内容に踏み込んだ議論をしていない。郵便事業はいま、山の中、離れ小島も均等にサービスしていますが、採算に合わない部分を一体どう守るのかが問題です。いまの仕組みでは、民営化した上の銀行業務

と、簡易保険にあたる保険業務で収益が上がるでしょうから、そこから不採算事業の郵便に金を回すという仕組みですが、本当にそんな形で民営化といえるのでしょうか。しかもそれは 10 年～20 年という長いスパンで考えているようですが、そういう体制が維持できるのかどうか、私は大変に疑問に思っています。

小泉政治の問題点

問題点をいくつか挙げて見たいと思います。「罪」にあたる部分です。

まず、私は「政治手法」、これは非常に問題があると思います。参議院が郵政民営化に反対したからといって、衆議院を解散しました。これはどう考えても理に合わない。衆議院が反対したなら、それはわかります。「衆議院と私の意思は違うから、国民が判断してくれ」というのならわかります。しかし衆議院は郵政民営化法案を通している。それを参議院が反対したからといって衆議院を解散したのは、解散権の乱用ではないかという感じがします。

憲法には、衆議院と参議院で議決が異なったときの処理の仕方をはっきり決められています。衆議院は通った、参議院は否決した、その場合はもう一度衆議院に戻して、３分の２の多数を得たならば法案として成立しますという規定がある。小泉さんはそんなものには目もくれずに、まっしぐらに解散してしまった。重ね重ね問題があると私は思います。国民投票の代りに衆議院を解散したと小泉さんはおっしゃるが、しかし国民投票の代わりに国民が選んだ衆議院議員をみな首にしてしまっていいのでしょうか。これもずいぶん衆議院を馬鹿にした、軽視した話だと思います。

それから、結果として行なわれた単一争点選挙、「郵政民営化は是か非か」という選挙、これはどうでしょうか、私は非常に危険性を孕んだ選挙だと思います。現実に「郵政民営化問題」などは、あのあと１ヵ月で全部解決してしまいました。政府案がそのとおり通った。だけど、自民党・公明党が獲得した３分の２を越す議席は、そのままずっと残っている。あと３年か４年やろうという、しかも約束したのは「郵政民営化」だけであります。何も約束していないことを、これから３年も４年もあの多数でやろうというのは、「白紙委任選挙」「おまかせ選挙」であって、非常に問題があると思います。

まだ「郵政民営化」のようなことだからいいですが、例えばこれがナショナリズムに訴えるようなやりかた、「どこかの国はけしからん。徹底的にやろう」「そのためには選挙で有権者の意思を確認しよう」などということになると国際的な騒動になりかねないわけで、この単一争点選挙というのはルール違反だと思います。

選挙というものは、「何年間かこういう政治をやりました」という業績評価をした上で、続けてもらおう、いや替わってもらおうというのが常道だと思います。これはもう、決して再びやってはいけないやり方です。このように、小泉さんの政治手法には禁じ手を使ったやり方が多かったと思います。

格差の問題、これは最近さかんに言われています。京都大学の橘木俊詔という先生が最初に所得格差に警鐘を鳴らしました。ところが大阪大の大竹文雄先生は「日本は高齢化が進んでいるから、見かけでは格差が生じているように見えるが、さほど心配する必要はない」という議論をして、小泉さんがそれに飛びついていますが、むずかしい専門家の議論は別にして、まわりを見渡してみると、派遣労働者、パートなど格差は歴然としています。地域の格差を見てもはっきりしています。私も地方に行く機会が多くありますが、盛んなのは東京だけであって、地方へ行くとすっかりさびれている感じがします。

もう一つ、アジア外交の失敗ということをぜひ申し上げたい。北朝鮮については、「ピョンヤン宣言」をつくって、みごとな将来像を描いたのですが、その後なかなか話は進展しない。これはだけど、ご存知のとおり相手が悪すぎますから小泉さんを責めても仕方がないと思います。中国、韓国については小泉さんに責任があると私は思います。A級戦犯が合祀された靖国神社に小泉さんが行く、これは内面の問題だから外国にとやかく言われる筋合いはないとおっしゃっている。支持する国民も多い。それは私にもわかります。

この問題を考える時、ヒントになる“富田メモ”というのがあります。今年(2006)、日経のスクープで明らかになりました。宮内庁長官をされた富田さんが昭和天皇とのやりとりをメモに残していました。そこで一つ明らかになったのは、昭和天皇は昭和50年以降、靖国神社の参拝をなさっていません。それは、A級戦犯が合祀されたので、それに不快を示してやめたということがはっきりしたということです。私の推測で申し上げれば、昭和天皇は律儀な人で、東京裁判というのを、日本はサンフランシスコ条約で政府として認めました、これを出発点として、戦争責任にけじめをつけて、戦後の日本が出発している以上、その原点を日本は本当に認めているのかと疑わせるようなことをしてはいけない、ということだったのではないでしょうか。考えてみれば、A級戦犯といわれた人たちはみな昭和天皇の臣下でありました。ですから、見方を変えれば昭和天皇の身代わりとしてあの人たちが有罪になり、処刑されたという見方もできます。そのA級戦犯を祀ってある靖国神社には行かないというのは、大変厳しい態度です。個人の情は別として、国際的な約束事の上に立っていることだから、守らなければならないというのが昭和天皇の考え方だったのではないかと私は推測します。

憲法で地位を決めている天皇と総理大臣が、同じ現実を前にして取った行動がまったく違う。昭和天皇はやめた、小泉さんは問題ないと言った。この問題に限って言えば、昭和天皇の参拝中止という方が正しいと思います。小泉さんのあのやり方には疑問があるということを申し上げたい。

日本の政治の将来はあまり明るくない

結論として申し上げれば、小泉さんは大衆と政治の距離を縮めた、ここは大いに評価したいと思います。でも、よく考えてみると、その大衆といわれた人たちの政治参加は2～

3年に1回の投票はしたけれども、それ以上に何の政治参加があったのか、やはり小泉劇場の観客であり、見物人に過ぎなかったのではないか。国民の政治参加とは言うけれど、政治家を尊敬しない、政党なんて誰も見向きもしない、この状況は少しも変わっていません。そういう見方をすると、小泉政治が日本の政治が抱えている根本問題に何かプラスの面を与えたかどうか、そう評価は高くないと思います。

ともかく、日本では政党に対するイメージが非常に悪い。この意識改革をしないとどうにもならないという感じがいたします。一方で、いま20才になると自動的に選挙権が与えられますが、20才になって選挙権を行使するに必要な、政治家を見分ける目だとか、政党を見抜く力だとか、そういうものを教育として基本的に施しているのか、そう考えると政治教育というものが大変お粗末ではないかという感じをもっています。やるべきことはまだいろいろ残っています。“お先真っ暗”ということではありませんが、現状のままでは、日本の政治の将来はあまり明るくないという、いくぶんペシミスティックな結論で、きょうの話を終わりにしたいと思います。長時間、ありがとうございました。

【質疑応答】

Q：「小泉劇場」で関心を呼び、選挙では本来の政策論争をよそに、「刺客」と称する候補者を立ててマスコミはそれを追い、それに乗った若い人たちが面白がってテレビを見る。そういうマスコミのありかたに問題はなかったか。

もう一点は、公明党抜きに今の政権は成り立たないからか、宗教法人には何も手がつけられていない。これでいいのか。

A：マスコミのことから申し上げますと、一線にいる記者の世代間格差を感じます。先程私は小泉さんが憲法に規定されていることを破る、禁じ手に近いことをしたと申し上げましたが、最近の若い記者にはそういう意識が少ない。なぜなのかを考えていますが、受けてきた教育の筋がどこかで変わったのか、私などはいま言ったようなことは理の当然だと思うのですが、若い記者に言うと「へえ、そういう見方もありますかね」くらいの受け取り方です。政治記者に限っていうと、最近の記者は「政治というものは基本的に権力闘争である」「権力闘争というのは、ノンルールで何があってもいいんだ」という、ゲーム感覚的な考え方が強いのではないか。私はそうではなくて、憲法は憲法としてきちんと判断していくのが政治ではないかと考えるのですが、どうもそこが違う。学者にもそれを感じます。明確には答えられませんが、基本的な考え方の違いが明らかにあります。特に、この10～15年に入ってきた人たちにはそれが顕著であります。

マスコミでもう一つ私がよく言っているのは「テレビよさようなら、パソコンよこんにちは」という世界です。パソコンというものは、これからテレビの機能も、新聞の機能も全部取り込めるわけです。だからこそ、各メディアはパソコンの分野にいかにして地歩を築こうかとは大変な競争をしています。しかしよく考えてみると、ではそれで新聞は駄目

になるか、テレビは駄目になるかというと、駄目にならないだろうと思います。結局、パソコンで情報交換がいかに便利になろうと、そこに情報提供するものが生きるわけで、これからは共存の時代になっていくと私は思います。その場合、政治との関係でいうと、テレビ・新聞とパソコンをどう棲み分けしていくかというと、法律で決めるしかない。野放しにはできませんから。政治の側がＮＨＫに対してばかりでなく、民放も含めてマスコミに対して統制することが強まると思います。けれどもパソコンのようなものが普及することによって、大衆レベルの意向が政治にすぐ反映するようになるでしょうから、マスコミと政治の関係は今よりまともになっていくだろうと思います。相互批判、緊張状態を保つということになるでしょう。一時的現象でいうと、いま、テレビや新聞と政治に対する緊張関係のようなものは少なくなっているのではないでしょうか。

もうひとつは、最近、主義・主張を前面に立て、それを売り物にしているマスコミが増えていることです。それは、いままでの没個性のマスコミに比べれば私はいいと思うのですが、あまりにも極端ではないか、狭いところに入りすぎてはいないかと感じます。全体を引いて見る視点も必要なのではないでしょうか。その中からカラーを出していくのがいいと私は思います。しかし最近は「100 人の人が見てくれなくてもいい３～４人、毎日購読してくれる人がいればいい」というようなマスコミが多いような気がします。

その意味で、ご指摘のとおり、マスコミの側にも問題があるというのはそのとおりであります。

先程、いまの若者はまともに新聞を読まなくなったといいましたが、新聞がないとテレビ欄がないので困る、そこで頭のいい人がいまして、テレビ欄だけつくった。そんないろいろな現象が起きていますが、ただ、一つのマスコミが巨大な力を持つような時代はなくなってきた。いろいろなところで分散して、それが相互にチェックし合う、それが「テレビよさようなら、パソコンよこんにちは」ではないかと思います。

もう一つ付け加えますと、自分がテレビの仕事をしながら言うのはなんですが、子供を育てるときに「テレビを見てはいけません」とやると、学校の成績は上がるのではないでしょうか。私はそういう教育を子供にしませんでしたが、まわりを見るとテレビを全然見させないで、学校の成績がよくて、一流大学に入ったというような話があります。日本全体を考えたとき、これほどテレビ漬けになった国民は相当に馬鹿になっているのではないかと思うのですが、どうでしょう。１時間、テレビを見る時間を減らそうではないか、それによって日本の社会は随分よくなる。テレビの世界もそれによってよくなる。サッカーを見ているより、自分でやった方が面白いでしょう。政治もそうです。日曜日にテレビで政治論争をガンガンやりあっているのを見ていても面白くない。「こいつひとつ、育ててやろう」という政治活動をした方が面白い。とりとめのない話をしましたが、まあそんなことです。

それから宗教法人の税金のことは専門家がおっしゃるのだからそのとおりだと思いますが、小さなことですよ。公明党をとやかく言う人がいますが、私は政党としては評価すべ

きだと思います。昭和30年代、我々、安保世代には「極貧層の自民党支持」ということが言われました。日本で一番貧しい人たちが自民党に投票している。そういう現象がありました。それを政治レベルでいうと、そういう層を吸収していったのが公明党です。公明党の悪口をいうよりも、むしろあれくらいの組織力を自民党にせよ、民主党にせよ、お手本にしてやって欲しいくらいに思います。本当の組織政党といえるのは、いま共産党と公明党だけです。「潤沢な金があるからああいうことができる」などと言っていないで、「立派じゃないか。あれをお手本にして近代政党に脱皮しよう」というのが筋ではないかと思います。税金の話は私は知りません。

Q：近代政党に脱皮せよとおっしゃいますが、近代政党とは、どんなふうにお考えですか。

A：私が考えるには、党員の数を少なくして、忠誠心を求めて、鉄の規律でしばっていくという、昔、レーニンがやったような、もっと遡ればフランス革命でジャコバン派がやったような、ああいう政党はこれからは駄目だと思います。誰も寄ってこない。

先程申し上げとおり、パソコンのようなものを利用して、ゆるやかな連帯をもって、一つの政党として統一的な意思のもてるようなものを何か工夫できないかと思います。模索している人もいますが、なかなかうまくいかない。

今の自民党は後援会組織が連合しているだけですから、近代政党の体はなしていないと思いますが、どちらかというと、そういう後援会的要素があってもいいと思います。パソコンがいい例ですが、アメーバーのようにあちこちに入り込んでいきます。ああいうもので“ケース・バイ・ケース”で、しょっちゅう組替えていって、この問題についてはこういう形の絆を形成していこう、別な問題になったらまた別れる。入るも出るも自由といったアメーバーのような組織体ができないかと私は考えています。ＮＰＯ的なもの、ネットワーク的なもの、後援会的なもの、そんな要素をうまく融合させて、新しい政党像が出来ないかと模索していますが、はっきりしたものを提示はできません。おおざっぱにいうとそんなことを考えています。

＜四中先輩インタビュー＞

わが人生畜産一筋に60年

矢野　幸男(S18)

◆平成19(2007)年7月2日

市川市男女共同参画センターにて

＜矢野幸男氏略歴＞

昭和18年　府立第四中学卒業

第一高等学校理科乙類入学

昭和20年　東京工業大学電気化学科入学

昭和25年　同大学理学系化学科卒業

農林省畜産試験場に就職

昭和40年　（社）日本食肉加工協会へ転職

昭和48年　東北大学にて学位論文「肉製品の基礎的製造法」により農学博士の学位取得（学位記番号：農第123号）

現在、日本食肉技術研究会　会長

矢野 幸男氏

――学位取得の経緯は？

学位論文は、私が畜産試験場から食肉加工協会にいる間に発表したいくつかの文章をまとめて一本化した。最初は簡単に「ハム・ソーセージの製造法」と考えていたら、教授から「もう少し広くとらえて基礎的な部分を書け」と言われて「肉製品の製造技術に関する基礎的製造法」というタイトルにして、内容にも厚みをもたせた。

――どうして東大を辞退して東工大へ？

昭和18年に四中を卒業して、たまたま一高に合格した。一高で2年生になった途端に安倍能成（あべよししげ）校長から「お国のために勤労動員に行け」と言われて昭和19年4月からは卒業まで、1年間勤労動員で過ごした。日立製作所の多賀工場では、飛行機用の発電機づくりを手伝った。完成品にナンバーを打刻するときに体をひねってハンマーを振り上げる。その内どうも腰がいたいので医者に行ったら、「それはサボり病だ」と言って取り合ってくれない。今で言う坐骨神経痛の始まりだったらしい。その後、東京に帰ったが、体を壊したので満足に動員の仕事も勉強もできなかった。結局、私は一高では1年しか授業を受けないで卒業してしまった。

一高から東大に行く時、要は卒業のときは勉強しなかったので「青電」だった。「赤電」は終電車で、その一本前が「青電」、だから下から2番目だった。それでも一応一高だから東大に配給になった。（当時敗戦間近の戦時下で入学試験など行なうどころではなく、卒業生は志望校に否応なく配られた。これが配給制である）農学部への合格の通知をもらったが、聞いてみると農学部は農芸化学以外は徴兵延期がないという。私への合格通知は農学科、所謂純農である。これでは不本意なので、他の大学へ入り直そうとしたら、東大合格を辞退しないとそれはできないという。しかも、一高の学校長の推薦がなければならないというので、安倍能成校長のところにお願いに行った。すると安倍校長に「きみ、それは徴兵忌避というものだ」と言われたが、「いや、それでもお願いしたい」といって承認状をもらって東大に断りにいった。ちょうどその日は空襲の最中で、御茶ノ水駅から東大に向かう途中で空襲警報が鳴っていた。それでも一応届けを出して東大農学部は辞退することができた。

さて、次にどこへ行こうかと探すと京大の薬学部なら入れるという。薬学部も徴兵延期があった。ところが私の次にいた「赤電」の男が、「私が行きたい。何とか譲ってくれ」というので譲った。私は家が東京だし、兄は出征しているし、父はすでに死んでいるし、妹が二人いる。母は「いまさら京都へ行くなどやめてくれ」という。そう言われては仕方がないというので、調べたら東京工業大学の電気化学科が空いていた。「これは面白そうだ」と思い入学した。学生数は1学年が35人くらいで、4講座あった。第1研究室は武井教授で電気炉の大家、第2研究室は杉野教授の有機電解化学、私はその中の大戸（おおと）先生の研究室に入った。第3研究室は星野教授のコンピューターや電磁波の研究、第4研究室は水野教授の放電化学などの研究をしていた。オゾンで代表される放電化学のようなガス体の研究は結果が明確につかみ難い分野で、統計法で証明するしかない。水野教授はその後、その統計学の方で有名になられた。軽部先生という方が先端科学技術では有名だが、彼は水野教授の子飼いだったと思う。

この頃、私が興味をもったのはオゾンだった。これを“殺菌”に何とか利用できないかと考えた。これは後で取り組むようになるが、それとは別に、私も肉の品質などを調べるのに、統計を使った。

私が入った研究室の大戸教授は、昭和14年に手づくりで「ＰＨ（ペーハー）メーター」をつくった、と聞いている。

――大学は何年に入学して、何年に卒業されたのですか？

私は大学入学が昭和20年で、卒業は昭和25年3月。本来なら昭和23年に卒業するところを、体を壊したり、アルバイトをしていたので遅れた。アルバイトといっても当時は闇屋の手伝いだった。

卒業後の実験では、グリシンにシアナミドを作用させ、ＣＨを一つくっ付けてザルコシ

ン(Sarcosin)をつくる、それができると同じ手法でどんどん単一アミノ酸の炭素数を増やすことができるというような、アミノ酸の合成の研究をした。

アルバイトや金稼ぎをしていたので卒業論文も半分くらいしかできなかったので、卒業は2年遅れた。

――戦後の混乱期に就職はどのように？

昭和 25 年4月に大戸研究室を出て卒業証書はもらったけれども、就職運動はしなかった。「さあ、何処へ行こうか」となったとき、学生時代に工場で体を壊したので、工場は嫌だと思っていた。たまたま先生が富山の高等学校の先生の就職口を紹介してくれた。田舎で体を治すのもいいだろうと決心して手紙を出した。ところが速達で出さなかったので、大雪で期限までに富山に届かなかった。後での話で「せっかく応募して戴いたけれど、書類が届かなかったので別の先生で決めました」ということだった。仕様がないということで、大戸先生の関連された薬品会社に紹介され、そこで2ヵ月ほどアルバイトをしていた。その内に「農林省の畜産試験場に行かないか」という話がきた。

昭和 25 年7月に畜産試験場へ受けに行った。そのとき、本物のハムをご馳走になった。畜産試験場は国内の食品メーカーに肉製品のつくり方を指導していた。肉製品を普及することがメインの仕事だった。私はそこで働くことにした。

――その畜産試験場では何をされていたのですか？

私は製造科第2研究室という肉の研究室に来てくれというのでそこに行った。いってみると実験室といってもビーカー一つない。私が其処に入ったときは同じ研究室に研究員が4人いたが、そのうち私を除くと3人はみな獣医であった。

私がそこで最初にした仕事は簡単なフラスコなどガラス器具を1万円買ったことだ。まだＰＨメーターを買うほどのお金がなかった。2ヵ月もすると、「肉の研究室には大卒なんかいらない」といわれた。それなら帰るかとも考えたが、仕事に手をつけて、いまさら帰る気にならない。私の前任者が高等農林出身だったらしく、それで発令元の農林省がそういうことを言ったらしい。帰る気がないことを上に伝えると「いくら話をしても通じないから、どこかいいところがあったらそっちへ行ったらどう？」と勝手なことを言う。そんな話はないだろうと思っていると、妥協案として「高卒と同じ条件でよければ居てよい」という。「勝手にしろ」という気持ちだった。最近でも、公務員採用で大卒を高卒と同じ条件でよければ採用するというニュースがあったばかりだが、まったく勝手なものだ。

いよいよ仕事を始めてみると、肉のＰＨ（ペーハー）を測るＰＨメーターがない。当時の科長・山本藤五郎さんのところにだけあった。彼は牛乳のＰＨを測るために誰にも触らせないという。仕方がないので、学生時代に大戸先生につくり方を教わっていたので、自分で即席の「ペーハー・メーター」をつくった。だから、肉のＰＨを最初に測ったのは私

ではないだろうか。

肉のＰＨというのは、鮮度を見る手がかりになる。鮮度が落ちると酸度が変化する。だから見学者が来るとアルカリ性の水につけると肉がグリーンになるところを見せたりする。

ここで、ちょっと当時の就職先の事情について触れて置こう。判り易いので畜産試験場と言っているが、敗戦後の組織変更で戦前の畜産試験場は農業技術研究所に吸収合併され、私の就職先は正式には農林省改良局農業技術研究所畜産化学部製造科であり、４つの研究室から成っていた。第１研究室は小澤さんという人が室長だった。ここでは牛乳の研究をしていた。小澤さんは後に名古屋大学の教授になられた方だ。

第２研究室は石井さんという、元々は牛の飼育をやっていた人で、私はその人のところに入ることになった。第３研究室は皮革の研究をする部署だった。皮革というのは戦争中、軍靴をはじめ軍隊ではあらゆるところに使われていて大事にされていた。私が東京工大にいたころにも、清水金之助という皮の研究者がいたくらいだ。

第３研究室の室長は東大の農芸化学を卒業した野崎という人で、一高の先輩だった。たまたまその人のところに遊びに行くと「肉なんか研究していないで、俺のところにきてアイソトープ（同位元素）の研究をしたらどうだ」という話があった。皮革は戦争に負けてあまり必要性なくなって、何か新しいことをしなければならないというので、アイソトープの研究が注目されるようになった。私は「これから肉が必要になるというのに、何をおっしゃいますか」と反論して、そこにはいかなかった。

一方、肉の方は誰も研究する人がいなかった。学会にいっても肉の研究発表は殆んどなかった。

ソーセージの色は普通ならピンク色をしているはずが、茶色になったり、場合によってはグリーンになったりする。どうすれば間違いなくピンク色のソーセージができるのか、私はそこが知りたくていろいろ資料を当ったりしていた。元々私は工大出だから、肉のことなど何も習っていない。研究資料も少ない。だから自分で調べるしかないので本を読んでいたら、どうも肉の中に硝石を入れると亜硝酸イオンに変って、それが肉中の色素ミオグロビンと結びついて色が固定するということがわかった。それなら何も硝石を加え、発酵を利用しなくとも、亜硝酸塩を入れてみたらどうだ、そうすれば反応して色が出ると考えた。ところが、調べてみると日本ではその方法は許可されていないという。それなら許可を取ろうじゃないかと働きかけて、厚生省の認可を取った。これが添加物の一つの始まりだ。そのとき私は特許を申請しておけばよかった。

――畜産試験場にずっと勤められたのですか？

昭和30年代に食品安全を脅かす事件が２つあった。

一つは昭和32年頃、第五福竜丸事件（昭和29年）に象徴されるように、南太平洋でのアメリカの原爆実験で被爆した「原爆マグロ」は食べられないというので一斉に値下がり

した。それ以前の冷凍ものまで売れなくなった。それで大洋漁業（マルハ）や日水などの水産会社はマグロの肉でソーセージをつくった。これは名はソーセージでも水産製品だった。肉製品は冷蔵庫で一定温度以下で保存しなければならない衛生規則があるが、魚肉のソーセージは水産製品だからこの規則は適用されない。そこで乾物屋でも売ることが出来た。ただし乾物屋で売るためにはＡＦ２（ニトロフリルアクリル酸アミド、後に有害で問題化）という防腐剤を使わなければならなかった。元々魚肉ソーセージは値段が安くなるが、原爆マグロのお陰でさらに安くなり、それでも原料は在庫の山になった。普通ならこれを処分しなければならなかったが、水産会社はそれを魚肉といわずに単に“ソーセージ”として売り出していた。それが昭和35年頃に問題となった。同じウィンナソーセージでも、肉でつくったウィンナソーセージは高価で、当然売れなくなるので、業界をあげての大トラブルとなった。

もう一つは、その少し後に、「牛肉の大和煮」と称して販売していた缶詰の原料に、実は鯨の肉が使用されていたことが発覚して表示違反で起訴された事件があった。これでは加工食品の品質の安定性が脅かされるというのが当時の業界の雰囲気で、特にハム・ソーセージ類については昭和37年にＪＡＳ（日本農林規格）が制定された。これを保証するためには検査をしなければならない。その検査をどこでするかというときに、肉類の加工品については社団法人・食肉加工協会というところが検査所をつくり、実施することになった。その検査所の所長として私は要請を受けた。本来ならば私より10年も先輩の石井さん（前出・畜産試験場製造科第２研究室室長）あたりが行くべきだったが、石井さんは34歳で早逝されて居られない。その２～３年後だったので、私に声がかかった。そう言われても、亡くなった室長分の欠員の補充も決まっていない、研究員は室長を含めて４人しかいなかったので、前室長と私が抜ければ２人になってしまう。そこで「後任が決まらないうちは、私は行かない」と粘った。

昭和39年末、兎も角後任１人分の約束ができたので、私は社団法人日本食肉加工協会の検査所長に移ることにした。そのとき農林省の当時の食肉鶏卵課長が私の家まで来られて丁重な要請を受けた覚えがある。その際、何か書いたものをもらって置けばよかっただろうに何もせず、実に呑気なものだった。

――農林省の管轄だったのですか？

（社）日本食肉加工協会からは、私は辞令の他は何の約束ももらっていない。後で聞いた話では、普通こういうときは、どのくらいの処遇で、将来どこまで面倒を見るのか、役員までするのかというようなものを国を通じて貰うのだそうだ。しかし食肉関係で農林省の外郭団体のようなところに転出した例は畜産試験場では過去になく、初めてのケースだったので放出準備も考えていなかったのだろう。割愛申請書をちゃんともらっていれば、写しでももっていれば、後で病気で辞めてもなにがしかの配慮があったはずだ。（注：「割

愛」とは「本当は出せない人間だろうけれども、そこを敢えて来てもらいたい」ということだから「割愛申請」となる）

ところが、私が（社）日本食肉加工協会を辞める段になったときに、文句があるなら何か書類があるかと言われた。お役所というところは、そういう書類や日付といったことに大変厳しいことがわかった。

〔【註】この項、私の思い違いで、農林省と（社）日本食肉加工協会との間には手続きがきちんとされていたかも知れない。但し、私個人としては一切書類を目にしていないので、こういう発言になったことをお断りして置く〕

――食肉加工協会では何を？

昭和 45 年にまた表示違反の問題があり、ＪＡＳの改正があった。そのときに「亜硝酸塩は発ガン性がある」というので禁止が問題にされた。

元来、肉は塩と硝石に漬け込むと色が固定する、要するにハムのつくり方と同じで赤みが固定するというのでそうしていた。微生物によって硝石が亜硝酸カリウムに変化すると赤みがかった色が固定する。それが発ガン性があるというので大騒ぎになった。実際は肉よりも家畜の餌から問題になった。餌の中に防腐剤として硝石を混ぜて、保存中に発酵した餌を食べた家畜から癌が発生し、問題になった。

それでなくても、もともと亜硝酸塩自体には毒性がある。満州から帰ってきた人たちは亜硝酸塩を使う方法を知っていて、隠れて使っていた。硝石自体は何の害もないが、亜硝酸カリウムになると劇薬に変化する。それで昭和 27 年、食品衛生法の改正にあたって、その経緯を科学的に証明して、「亜硝酸塩は使ってよろしい。ただしその管理をきちっとするように」となった。それまでは亜硝酸塩は使用の対象にさえなっていなかった。

それが、改めて問題になって、ＪＡＳ規格を変更せざるを得なくなった。私はその改正の原案づくりをしていた。例えば「亜硝酸塩を使わないものでもハムと言うことを認める」というような規格をつくっていた。

――先日、北海道の食肉加工会社が牛肉に馬肉など混ぜていましたが、あれはＪＡＳ違反ですよね？

本来、ＪＡＳという基準は全国的に加工食品を販売しているような会社を対象としたもので、牛肉そのものを販売するようなところは対象にしていない。全国販売している加工会社は、どこで、誰が、どのようにつくっているかわからないので、消費者の安全のために一定の規約をつくり、監視をしようというのがＪＡＳの精神だ。だから最近あった北海道の食肉会社が混ぜ物をしたというようなことはＪＡＳの対象にはならない。

――うちはちゃんとやっているから必要ないという会社もあったでしょう？

中には「うちはきちんとやっているから、そんな検査の必要はない」という会社もあった。なかでも一番てこずったのは中村屋だ。中村屋もハム・ソーセージの工場をもっていてつくっていたが、「自分の店で売っているだけだからうちは何もそんなものは必要ない」という理由で拒否していた。しかし大きい会社はすべて入るのだという方向に誘導して、農林省もその方が一定基準で管理しやすいということもあって、広げていった。

肉製品をつくるときいろいろな肉を混ぜるが、そのときにいい加減なことをされると困るというので、検査所で肉種鑑別ということをするようにもなった。そのときの肉種鑑別の方法は抗体反応で行なった。これは私がいるときに決めた。熱が加わると抗体が利かなくなるという問題もあったが、それは後で解決すれば良いのであって、とにかく科学的に分析すると言う方法をとった。今、どうなっているのか、工場検査をやれば充分カバーできるというので、実施の方向で報告書を出した。それがその後進んで、いまではＤＮＡ鑑定になっている。そういう方向を決めたのは私だ。強引だったが、いけると思って決断した。

その検査で問題になったのは、岩手畜産という会社だった。馬肉を入れた魚函を良く洗わないと血液が残る。そこに牛肉などを入れると血液が混ざって誤解を生じる。それが検査でわかった。

――矢野さんが実施された食肉鑑別法は、今どういう効果を生んでいますか？

いま食肉加工協会の検査所は、つい最近変って、食肉科学研究所という中間法人になっている。そこがいま肉種鑑別を行なっている。（方法は多分ＤＮＡ法）

――消費者にとっては、肉種がわかるということは安全・安心につながる？

そのとおり。というのは、自分たちで必要とあればいくらでも調べられますから。

――鑑別結果が売る側の値段と関係しますか？

全然関連しません。安全・安心のためです。本当は値段と関係ある。豚肉と牛肉ではまったく値段が違う。ただ、私がいま怒っているのは、ロースハムが水増しされていることだ。本来、肉に注射器で水を入れるのは塩を入れるためで、水を入るにしても乾燥させて飛ばせば良いが、それをもったいないからそのままにする。そうすると本当に水増しになってしまう。最近は買う方も軟らかい方がいいというので文句を言わない。それを良いことにしている。

――検査所の所長としてなさったことは？

もう一つ私がやったのは、ＪＡＳ認定会社の全工場を毎年必ず検査することにした。商品安全の認定は工場単位だから、すべての工場は毎年少なくとも１回は検査を受けさせた。

いまでも続いているはずだ。

本来、ＪＡＳ製品製造工場は毎日製品をつくっているわけだから毎日検査しなければならない。検査官が毎日行って監督して、抜き取り検査する方法を第１種検査という。しかしそれは容易ではないので、「間違いなくやっています」という工場であれば、簡易的に１週間に１回ずつ品物を送ってくれれば、それを検査して間違いなければ認可しますよ、といって代行をやらせる。それを第２種検査という。それがさらに進むと第３種検査になり、月１回の検査で済むようになる。そうなった向上は認定工場と呼ばれ看板が掲げられる。トラブルがあった工場は第３種、第２種検査から、第１種検査に切り替える。そういうルールにしてある。

たまたま私が経験した例では、昭和畜産という会社が製造日を先付けで出した例があった。たまたま正月間際だったので、1月2日発売の商品を12月30日に店頭に置いていた。それを農林省のＪＡＳ検査官が年末に買物に行って発見して「先付けの商品が店頭に並べられている」と通報があった。私はその会社に電話で注意した。すると12月31日にはすでに店頭から姿を消していた。このときは、違反そのものよりも、「誰が通報したか」という方が問題になった。しかし違反は違反なので第２種認定工場の看板を１ヵ月間下ろさせた。この話はデパートなど仕入れる側に知れ渡って誰もその会社から品物を取らなくなり、結局、その会社は倒産した。

そのあと、昭和 50 年だったか、私が病気した後、同じようなことを日本ハムがやったらしい。そのときすでに私は責任者ではなかったが、その違反行為に対する罰則規定がなかったので、日本ハムは、「もし認定を取り消すようなことをしたら大臣に抗議をする」と開き直り、結局、農林省も引っ込んだと聞いている。

――燻製は検査の対象にならないのですか？

燻製というのは、肉を長持ちさせるためのもので、鶏肉などはすぐ食べてしまうから問題ない。牛や豚は大きいからいっぺんには食べられない。だから保存方法が発達した。１頭殺したら、それを１年中食べる。それには塩漬けにして、燻して取っておく。それも腿あたりが一番大きいから、ベーコンにしたりハムにしたりする。ベーコンは英語で二つの意味がある。一つは「塩漬けした肉」、もう一つは「塩漬けした角型の肉」だ。一般に洗濯板のようなものをベーコンといっているが、あれはスワブ(swab)ベーコンという。枝肉全体を燻すのが本来のベーコンだ。だからハムは”ham of bacon”で、ベーコンの腿（ハム）だ。日本には古くから”ham of bacon”が入ってきたから、それがハムとして有名になった。骨付きのままでは食べにくいので、それを崩して、俵状に巻いて製品にした。骨を抜いたから「ボーンレス（骨無し）ハム」だ。それと別な部位を使って、ロースでつくったのが「ロースハム」だ。

――食肉加工協会をお辞めになったのはいつ、またなぜ？

話を戻すと、ＪＡＳ改正の議論の最中（昭和 50 年）に私が脳溢血で倒れた。３月頃だった。朝 10 時頃から協会で会議をやって、午後５時頃に終った。その間、私がすべて取り仕切っていた。昼食時にも電話で農林省担当官とやり取りをしていた。会議後、せっかく委員の方々に来てもらったのだからと、食事の手配までした後で、自分のデスクに戻る途中、いきなり手がだらんとして、持っていた書類を落としてしまった。たまたま皆と一緒だったので、気づいて応接室の椅子に座らせてくれた。私は「具合が悪いから、あとは頼むよ」という話をしているうちに、ひっくりかえってしまった。

気が着いたら目が明るい。眼底検査をしていた。「おっ、俺はまだ生きている」というのが最初の意識だった。そのときには担架に載せられていた。後から思えば、議論していたときに目のまわりに火花がくるくると回る感じがあった。立って話をして、説明して、腰をおろす、そのときにそんな感じがあった。大したことはないと自分では思っていた。

それからそのまま東京で約３ヵ月の入院、半身不随で右半身が動かなかった。手術はしなかった。５月に千葉に転院し、７月に退院できる予定が、Ｂ型肝炎の疑いがあるというので２ヵ月延びた。結局、半年入院していたことになる。９月に自宅に戻った。

半年後に職場に戻ったが、やはり半身が動かないので、自分では頑張るつもりでいても、周囲に気を使わせるのではないかと思って身を引くことにした。他にもやるべきこともあるので「譲る」と言ってしまった。すると態度ががらりと変った。私は 65 才くらいが定年と思っていたのが、いつの間にか 57 才になっていた。一般職は定年が 57 才、延ばしても 60 才。そのあと役員にでもなればまた延びるというようなことが一般の基準だった。

私が病気になったときに理事長だった人が伊藤傳蔵という伊藤ハムの社長だった。辞意表明後、私の待遇がおかしいので伊藤氏に相談したところ、彼は「伊藤ハムの技術顧問を兼任してくれ」と、個人的に面倒みてくれた。理想を言えば組織のなかできちっとされればよかったのだが、こちらもあまり突っ張るつもりはなかったので、伊藤氏に相談に行ったのだが、その時、伊藤氏も「あれ、聞いている話とだいぶ違うな」とおっしゃった。これで「やられたな」とわかった。

検査所長を辞めたのは、病気から復帰して半年後くらいだから、昭和 51 年だったと思う。昭和 40 年からだから約 11 年間、私は試験所の所長として毎日、食肉の検査にあたると同時に、研究も必要だったので研究室もつくった。ＪＡＳマークを付けるための保証検査だから、細菌研究室もつくってそこで研究させた。

――大槻さん（四中 S11 卒）との接点はいつ、どこで？

大槻さんと知り合ったのは、四中時代に「大槻言海」の孫がいるという話を同級生の誰かが耳打ちしてくれて、実際、大槻さんと四中時代に会ったことがある。大槻さんが補習科の１年生で、私が１年生だった頃。大槻さんが浪人していたので接点ができた。雨天体

操場があって、そこにつながる渡り廊下で大槻さんにお会いした。

その後、私が畜産試験場に行くと、そこに大槻さんがいらした。しかし大槻さんは家畜の繁殖の方だったし、私は製造科の食肉の方で、職場が違っていたのであまり接触はなかった。だから戦時中に大槻さんがインパールに行った（城北会千葉支部会誌第1号H16.11掲載）というようなことは、後に城北会でお会いするようになってから知ったことだ。

ただ、畜産試験場で私を採用してくれた第2研究室の石井さんは、戦争中牛舎の係りだった人で、戦争から帰ってきて行くところがないからというので食肉の研究室に入っていた。大槻さんは戦争から帰ってきて、牛の繁殖を研究しておられた。だから石井さんと大槻さんは畜産試験場の同僚として付き合っていた。そのうちに、畜産試験場の中に東京都人会というのができた。東京出身の人が集る県人会のようなものだ。そのときに大槻さんも出てきて、私は四中時代の大槻さんのことを覚えていたが、大槻さんの方は初対面のようなもので、私が「こういうことがありましたよ」という話をして初めて打ち解けた。そのうちに、都人会とは別に千葉城北会の話が田さん（田壽郎・でんとしろう四中S7卒）からあって、私ははじめ出ていなかったが、病気をして暇ができたので、大槻さんが「田さんが一生懸命やっているから」というので、「ではしょうがない、出てみようか」ということになった。

――矢野さんは日本に食肉文化を伝えた一人ですね？

いやいや、もっと先輩がいる。飯田吉英という先生がいて、ハム・ソーセージを明治時代からつくり、食べていた。よく勉強もしていた。亡くなったのは99才。長命の人だった。

＜四中先輩インタビュー＞三宅　次郎氏（S20卒）

四中、武蔵高校、闘病、そして会社設立

レポーター：齋藤　和子

今回の支部会誌第4号の「四中先輩インタビュー」に、平成7～8年に城北会千葉支部長をつとめられた三宅次郎氏のお話を掲載しようと、去る2007年6月11日、尾崎英二支部長と私・齋藤和子で三宅氏自宅を訪問しました。そのときのお話を私・齋藤が要点のみご報告いたします。

ところが原稿を添削していただくためご自宅に郵送して、取りにうかがう電話をしましたら、奥様からご主人が急逝されたと聞かされました。8月26日のことでした。あまりにも突然のことで言葉もありませんでした。

ご冥福を祈りつつ、そのときうかがったお話をお伝えいたします。

三宅 次郎氏(故人)

府立四中時代

—私は下落合の小学校から、昭和16年に府立第四中学に入学した。

—四中の徽章にギリシャ文字のパイが入っているので“パイ中”といわれた。

—当時の府立中学の順位は一中（現・日比谷)、四中（現・戸山)、三中（現・両国)、五中（現・小石川)、六中（現・新宿）だった。

—四中はカバンのかけかた、ゲートルの巻き方などいろいろうるさい学校だった。

—林　望著　講談社「帰らぬ遠い昔」1992 年刊　に当時のことが書いてある。

＜林　望氏　昭和24(1949)年生まれ。昭和42(1967)年戸山卒＞

—四中は4年で出された。昭和20年春に卒業。その後7年制の武蔵高校に編入で入り、3年間通った。

—四中時代、深井鑑一郎先生の思い出としては、(校内で)“わけのわからないおやじが来る”と思ったら、それが深井校長だった。柴田先生（ガンマ）が丁寧にお辞儀をしていたので校長とわかった。深井校長はちょうど私の入学の年、昭和16年にやめた。

—記憶に残る先生は三浦先生、「スッポン」というあだ名だった。午後からの授業のとき、おっかない顔をして入ってくるときは機嫌が悪く、ひっぱたかれた。

ニコニコして入ってくるときは残されなかった。
—三浦先生は理系については解析幾何学など、詳しく説明された。(恐らく、理系に進むことを先生は望んでいたのだろう)
—<理系の続き>「物質とは？」とか「金、ウンコがねー」とか、説明された。
—1、2時間残されるが、ガンマがついていてくれた。
—“お茶さん”というあだ名の先生がいた。第五女学校から来た先生だった。
—那須修養道場でのことだったと思うが、「飛び込んでみろ」と言われて生徒が飛び込んで死んだことがあった。(そんなスパルタ教育の学校だった)
—色物のシャツは禁止で、白いものしか許されなかった。
—那須の修養道場に行った。ここでのモットーは「着実、勤勉、服従」だった。ブタを飼っていた。梅の木のテングス病などを教わった。勉強の道具は何も持って行ってはいけないといわれた。祝詞(のりと)をあげさせられた。
—たいてい、甲組、乙組など成績のよい方から順に呼ばれた。体操のときには甲組、乙組から呼ばれるのでバレテしまう。
—<高校進学のとき>地域によって受験するところが決まっていた。「東京府立四中」と書いた名札をつけて受験した。

武蔵高校時代

—武蔵のときも厳しかった。武蔵の尋常科からあがってきた中に秀才がいた。
—武蔵からは東大には数人しか入らなかった。四中は3、4番くらい。一中は1、2番。
—武蔵高校と四中と似たところがあった。武蔵の子弟の中には、母がアメリカ英語を話し父が英国英語を話せるような親をもった子がいた。解析概論を中学のうちからやっている者もいた。彼らのうちの何人かは、後にアメリカへ行って帰ってこなかった。
　武蔵高校には正田一族がいた。正田美智子さんの兄は武蔵の2年下、文科系だった。
—四中には水練部があった。
—イタイイタイ病の原因をつきとめた人は友人である。予科練から帰ってきて四中、武蔵へ入った。武蔵でまた会った。<藤掛康夫氏　東大工学部卒　チッソ石油化学代表>
—武蔵高校で西田幾多郎の孫が自分と同級であった。
—武蔵高校の先輩である東竜太郎(元東京都知事)の息子が順天堂の学長になったが、早くに亡くなった。この人は館山病院の院長もした。私はその息子に2回会っている。空襲があった日とルーズベルトが亡くなった日だ。私も寮にいたが東竜太郎の息子も寮にいた。

フクダ電子時代

—「フクダ電子南関東販売株式会社」(医療機器の販売会社)は自己資金で始めた。70歳のとき株を売って社長をやめた。やめるとき、ずっと仕事だけできた

ので“これでいいのだろうか”と考えた。趣味はないし、それまで忙しくしてきたので、突然やることがなくなりゴロゴロしていた。
—フクダ電子南関東販売株式会社の社長を、創立以来ずっと長くやっていたので顧客がついていた。現在でも顧客がついている。

健康について
—20歳のとき、大学を受けるときに身体検査で結核がみつかった。兄が千葉大の医者で、入院して肺切除の手術を受けた。(当時はストレプトマイシンという特効薬がなかったので)肋骨を取る大手術だった。子供のころから喘息持ちで、その頃にも喘息が出たので、決まった仕事(例えば先生など勤務時間が決まっている仕事)はできないと言われた。
—そこで医療機器を売る仕事を立ち上げた。それがフクダ電子南関東販売株式会社である。
—結核のあと喘息がでた。喘息は“ヒー”というような音がして、息ができなくなる。現在も呼吸器内科受診している。在宅酸素もやっている。
—ギックリ腰を何回かやって、現在も腰が悪い。圧迫骨折である。したがって運転はしない。医師の兄は小児マヒで、足が不自由だった。

奥様について
—妻は昭和35年に嫁いできた。
—妻は九州大学を卒業している。父の転勤であちこち行った。
—奥さんのコメント:「四中の出はえらくならない」と本人は言っていた。

好きな曲
—私の好きな曲はバッハの組曲である。肺を患って千葉大に入院のときに聴いたのがきっかけである。肺結核で入院しろといわれ、穴が開いていると言われ、絶望感に陥っていた。そのとき聴いた曲がバッハの組曲だった。自分は絶対安静など出来なかったので、音楽を聴いていた。(6月11日のインタビューの最後にCDをかけてくださった。曲名はバッハの「G線上のアリア」であった)

これからのこと
—妻の家は神道、私は浄土宗。今現在死にたいとは思わない。ふっと、どうなるのかなーとは思う。
—現在特に何も心配ない。
—現在デイケアに週1回行っている。

以 上

追悼の記

齋藤　和子（S29卒）

三宅氏は平成7年から平成8年まで城北会千葉支部長をつとめられました。

三宅氏が支部長をしておられたころ、私は千葉大看護学部の教員をしており、フクダ電子南関東販売株式会社がすぐ近くでしたので、社長の三宅氏に何度かお会いしました。会社は千葉市亥の鼻（いのはな）にあり、千葉大医学部・看護学部と道路を挟んで反対側にありました。

三宅氏とのインタビューは当初の予定では今年4月8日にお宅に伺うはずでしたが、前日にご子息から電話があり、奥様が転んで目下入院しているのでインタビューは後日にしてほしいと言うことでした。その後にお電話をして6月11日となりました。フクダ電子より奥に入ったご自宅でお話を伺いました。奥様も同席され、茶菓のおもてなしを受け、前記のようにバッハの組曲を聴かせていただきました。お二人ともお元気で、平穏な日々と拝見いたしました。

その後、私のメモをもとに原稿にして三宅氏宅にお送りして補足等をお願いしていました。添削された原稿を頂きに上がろうとお電話したところ奥様が出られ、すでに亡くなられたということでした。驚いて、しばし言葉も出ませんでした。亡くなったのは8月26日の午後4時頃、奥様が気付いたときはすでに息はなかったとのことでした。享年79歳でした。お生まれが昭和3年8月25日なので79歳の誕生日の翌日に亡くなられたことになります。死去については近親者以外には通知されなかったそうです。

10月8日は四十九日の法要とのことなので、その前日7日に斉藤徳浩氏と齋藤和子の二人でお宅に伺いました。そこで骨壷に納められたお骨とご遺影に対面しました。また奥様から6月11日のインタビューの補足、および最後のころのご様子をお聞きしました。奥様のお話では、6月11日は珍しくお元気で、思い出すままにいろいろ話をされたのだそうです。そしてインタビューの最後にお好きだったバッハの組曲をご一緒に聴きました。平和な午後の一刻でした。今回ＣＤを見せていただいたら、曲はバッハの「Ｇ線上のアリア」でした。

奥様のお話では、すでに昨年あたりから徐々に体力は落ちていたのだそうです。

三宅氏は穏やかな方でした。会社の事業活動もまさに“日々の糧を得るために”というものであったのだと考えられます。それ以上でも以下でもなかったようです。

今これを書いていて、私はポール・ヴァレリイの「海辺の墓地」という詩の一節を思い出しました。ここに記して献辞とします。

「ああ、神々の幽寂（しずけさ）に眺め入るこそ
　　ひとすじの思索のあとの報償（むくい）なれ。」

ご冥福をお祈りいたします。

（2007年10月9日記）

＜投稿原稿＞

マンションの大規模修繕について

城北会千葉支部長　尾 崎 英 二

ここ、12、3 年前程前から私はマンションの大規模修繕工事の改修の設計監理を多く手掛けるようになって来た。

一般的には多くの場合、マンションの大規模修繕は管理会社が管理組合に提案をして行っている。管理会社は修繕積立金の金額もつかんでおり、10 年に 1 度やるようにすすめているケースが多い。しかしながら建物の設計や施工の内容にもよるが 12～15 年に一度で技術的には充分である。

最近は組合の役員も勉強して、我々第三者の独立した建築家に相談を持ちかけてくるケースが増えて来た。それはマンションの管理会社の仕事のやり方が段々と役員に分って来たからではないだろうか。

実際の管理会社の仕事のやり方をみてみよう。

○ 管理会社は組合に提案するに当って、出入りの業者に現場の調査、仕様書の作成、見積書作成などの作業をやらせる。従って結果的にその業者に特命工事(競争によらないで特定の業者と契約すること)で契約させる。
もちろん形式的には何社か見積もりをとるが談合により調整するのである。
この結果組合側は実質の競争がないために工事費が高くなり、また特命業者は管理会社に経費を支払うので、その点でも高くなるのである。

＜実例 1＞大宮市の 120 戸のマンションで屋上防水の改修工事では、私共で改修設計をして管理会社を含む 4 社から見積書をとったところ、A 社(管理会社)2016 万　B 社 1942 万　C 社 1667 万　D 社 1575 万(数字税込)となり各社の説明も聞いた上で D 社に決定した。

＜実例 2＞品川区の 150 戸のマンションの大規模修繕(屋上防水、外壁躯体補修及び塗装、鉄部、アルミ手摺の塗装等)の改修工事では同じく管理会社を含む 4 社から見積書をとったところ、A 社 6353 万　B 社 6037 万　、C 社 6594 万、D 社(管理会社)7024 万(数字税込)となり、やはり各社の説明を聞いた上で B 社に決定した。

また、他の例では私共が設計監理に入ったために管理会社が見積りに応札しないこともあった。

管理組合の役員は 1 年交代の場合が多く、このことが管理会社まかせになってしまう要因の 1 つでもあると思い、私は管理組合役員の任期は 2 年で半数交代とするなど少しでも組合として自立した運営をはかることをおすすめしている次第である。

＜投稿原稿＞

コピーライター人生

城北会千葉支部副支部長　斉藤　徳浩

ほんとうは理工系に進みたかったが成績が悪くて断念した。高校で演劇部にいたため、早稲田の露文科へ進んだ。少しは本が読めるかと思ったらまったくあてが外れた。露文科は全学連主流派の巣窟だった。「60 年安保」の真っ只中、大学へ通うよりも国会周辺デモへ通う日の方が多かった。樺美智子さんが亡くなられた日もデモ隊の中にいた。催涙ガスというものが「催涙」などという生易しいものではなく、目は腫れるほど痛くなる、その上気力まで奪ってしまう恐ろしい効果があることも初めて知った。

露文科といえば先輩には五木寛之氏や、同僚には「上海バンスキング」でヒットした劇作家の斎藤憐（れん）氏がいる。いずれも中退だ。露文は中退しないと一流になれないらしい。私の時代には 47 人全員がまともに卒業して、それ以来、露文科はごく普通の学科になってしまった。成績優秀な者は放送局や新聞社へ進んだ。私はふてくされていて成績が悪く、まともな就職口はなかった。

そんなある日、「週刊文春」に“ペン一本で食える新商売――コピーライター”という見出しが躍っていた。ちょうど、アメリカのＤＤＢという広告代理店がワーゲンの広告、“Think small”（小さいことの価値を考えてみよう）などの一連の広告で、あの浪費型アメリカ社会に経済的小型車を大事に乗ることのインテリジェンスを訴えて成功した時期であった。それまでアートディレクターが牛耳っていた広告の世界に、「考えさせる広告」の旗頭としてコピーライターが頭角を現わしてきたのである。“これだ”と思って久保田宣伝研究所（現・宣伝会議）の「コピーライター養成講座」に在学中に高い授業料を払って半年間通った。

その講座の紹介で、卒業と同時に東芝の宣伝部長が独立してつくった小さなプロダクションに就職した。元宣伝部長だからえばったもので、おいしそうな仕事があると「これ、俺によこせ」といってとってくる。さっそく私は明治座のプログラムの裏表紙にある、山田五十鈴が「私も使っています」という東芝の冷蔵庫や洗濯機を奨めるシリーズ広告のコピーライティングからスタートした。山田五十鈴に会ったこともない駆け出しの若造がそのせりふを書く。「こんなことをしていていいのかなあ」というのが最初の疑問だった。

次の仕事は、小型の「おしぼり保温器」だった。小料理屋のカウンターの上でも使える便利なものだ。資料によるとおしぼりが常に適温に保たれると書いてある。私は「あったか～いおしぼりがいつでも」というキャッチフレーズを、「～」のところをことさら強調して東芝の宣伝部長に持っていった。すると宣伝部長は、「何だこりゃ。“アッチッチッチ”だろう。指でつまんで振ってさましながら、さて何にしようかなと考えるんじゃないのか。

コピー料をこっちがもらいたいくらいだ」と頭をガツーンとやられた。

そのうちに東芝レコードで坂本九ちゃんの「上を向いて歩こう」がアメリカで「スキヤキソング」として大ヒットしていたので、そのレコードジャケットをつくることになった。書家が色紙に書いてくれた文字をみると「鍬」となっている。「あれ、“鋤”じゃないの？」と言うと、「お前、わかっていないな。アメリカ人は漢字なんか読めないのだ。だったらカッコいい方がいいじゃないか」とまたもギャフンと言わされた。「“考えさせる広告”どころではない。宣伝というのは、人の気を引くためならなんでもありなんだ」ということがやっとわかってきた。

そんな毎日だったが、入社した年の年末には日本工業新聞や電波新聞など業界紙の新聞15段カラーの企業広告を何本もまかされた。

そのまま続けていればよかったのだが、翌年、誘われて印刷・出版の会社に転職した。しかしコピーライター病に毒された者としては夢断ちがたく、5年後にスバルの宣伝を専門とするプロダクションに転職した。真面目な、しかし仕事はきつい会社だった。以来38年間、いまも顧問として常勤している。

これは、ある指導者があってのことだが、その後のビジネス人生は充実した毎日であった。気がついてみると38年も経っていた。

初期には、クルマの宣伝、カタログ、セールスプロモーションなど制作の仕事をいろいろやらせていただいた。昭和46年にはレオーネという新車の導入に当時「また逢う日まで」でヒットしていた尾崎紀世彦を使ってテレビＣＭをつくった。彼は売れっ子で深夜にしかレコーディングする時間がとれない。我々は昼間のうちに「空オーケストラ」つまり「カラオケ」をつくっておいて、尾崎は深夜にヘッドホンをつけて歌う。そのころ「カラオケ」は業界用語だった。昭和50年には排ガス規制をクリヤーしたレオーネＳＥＥＣ－Ｔを宣伝するために、怪人二十面相を使って「わかるかね、明智君」というＣＭをつくった。スバルの排ガス浄化装置は触媒を使わないので「わかるかね」とやった。

しかし、広告宣伝でできることには限界があった。クルマが売れるようにするためには、やはり商品がよくて、販売力がなければならない。さらにいえば、よい商品ができる開発システム、企業体質がなければならない。販売力を強化するには魅力ある店舗はもちろん、人を育てる土壌、システム、企業体質がなければならない。もう一つ欠かせないのが、情熱をもったリーダーの存在だ。

トヨタにしても、ホンダにしても、成功している企業には上記のような条件がそろっていることがわかる。特にトップのリーダーシップと、尋常ではない勢いがあることがわかる。

私もスバルに携わらせていただいて、いろいろな分野に首を突っ込ませていただいた。そのプロセスを申し上げるわけにはいかないが、結果だけ申し上げると、レガシィという世界戦略車が完成し、その導入を成功させたこと、特に4ＷＤを特徴とする高速ワゴンを

ヒットさせたこと、ＷＲＣ（世界ラリー選手権）においてインプレッサが1995～1997年まで年間チャンピオンシップを３連覇したことなど、メーカー、ディーラーの総力を結集してできたことが無数にある。そのチームの一員に参加できたことを誇りに思っている。

その間、一貫してコピーを書き続けてきたのでコピーライター人生といってもいいだろう。「考えさせる広告」ができたかどうかは疑問だが、悔いのないビジネス人生であったといまは思っている。

◆お詫びと訂正

城北会千葉支部会誌第3号（平成18年11月発行）に誤りがありました。お詫びとともに訂正させていただきます。

支部会誌第3号、31ページ下段から、32ページ上段にかけて

「1945年3月27日に突然、日本軍に反旗を翻した。これを記念して3月27日をビルマの国軍記念日とし、暫くは「抗日デー」と紙上に表現していたが、今では、「反ファシストデー」と表現している。これは、親日的なビルマ政府が対日戦時賠償も放棄し、その代わり日本から多額の経済援助を受けたこともあり、最大限、日本に気を使って修正したものである」とありますが、事実誤認があり、文中、下線の部分を下記のとおり訂正させていただきます。

＜訂正＞

「対日戦時賠償を早期に解決し、その後日本から多額の経済援助を受けたこともあり」と直していただくようお願いいたします。

◆投稿のお願い

城北会千葉支部会誌は、毎回、定期総会に合わせて年1回発行しております。皆様の投稿をお待ちしております。

学校時代の思い出、現在の仕事柄感じていること、教育についてのご意見、ご趣味について、随想等何でも結構です。

投稿は毎年9月末までにお願いします。

投稿は下記事務局まで、Eメールまたは郵送にてお願いいたします。

住所、氏名、卒業年次をご記入ください。

城北会千葉支部会誌　第4号

平成19(2007)年11月発行

発行：城北会千葉支部

支部長　尾崎　英二（昭31）

副支部長　斉藤　徳浩（昭32）

副支部長　本橋　輝明（昭34）

顧　　問　齋藤　和子（昭29）

事務局：〒273-0042 船橋市前貝塚270-25

本橋　輝明

電話　090-6021-7397

E-mail: mteruak@attglobal.net